

この街のはじまりの
物語を、想像する

特集「うまやの もくばまつり
駅家ノ木馬祭」
アーティストコラム 伊藤 存

ARTIST'S VIEW / インタビュー

白川昌生

SHIRAKAWA YOSHIO

ARTIST'S VIEW



アーティストが切り取った前橋を紹介するコーナー



1 夏のあやりの菜



2 ブルーシートの上で



3 アルミ棒二本から



4 伸びすぎた枝



5 新しい彫刻つくづく



6 いさしぶりに弁天芸店

INTERVIEW

地域に受け継がれる
新しい祝祭
THE NEW FESTIVAL INHERITED BY THE LOCAL PEOPLE.

Photo: 木暮伸也

前橋の街に新しく生まれた「駅家ノ木馬祭（うまやのもくばまつり）」は、アーティストの白川昌生さんが創作した、地域にまつわる産業や名物、歴史上の実在の人物などを織り込んだ物語を下敷きに、実際に制作された木馬を引いて中心市街地を練り歩く祭りだ。「あるべきものがない。ならば作ればいい。」そんな視点から生まれたプロジェクトは、いつか地域に根付き、新たな風習として歴史を刻んでいくのだろうか。

一木馬祭りは始まって何回目になるんですか？

始まったのは2011年かな。今年で4回目になります。

一始まったきっかけは？

知り合いとか若い人で、弁天通りで街おこしをしている人がいて。そこで前橋が中心になるような物語があるといいねって話が出たんです。でも前橋にそういう話がないってうんで、僕が書いた。そしたら住友さん（アーツ前橋館長）の方

から2011年、震災の後すぐですね、実際に木馬祭りをやってみませんかという話をいただいて。それでみんなで木馬を作って、お祭りをやろうと。

一物語を書いている時は、実際にお祭りをやるつもりじゃなかったんですか？

全然ないよ。結局、萩原朔太郎は地味だし、国定忠治はヤクザだから、中間のポピュラーな人がいないってことで、それで国定忠治の息子を創作して二人をくっつけて物語を作ったら結構みんな面白が

って。

一物語に登場するのは架空の人物？

寅次は架空ですね。その周辺に登場する人たちは実在するので、史実や前橋の歴史とかも調べて。そういう話っていうのはみんな忘れてるから、前橋の街の始まりの時期にいろんな出来事があったことを、もう一回作り替えていくというか、こういうのもあったんじゃないのかみたいなね。

一実際の歴史の中で木馬祭りというのはあったんですか？

いやあ、ないでしょ？（笑）結局、僕がおかしいと思うのが、群馬という地名だったり、前橋も厩橋^{うまやばし}、つまり馬小屋があったってことが由来になってるのに、群馬には馬のお祭りってないんだよね。ひょっとしたらあったのかもしれないけど、消えちゃったのかもしれない。木馬祭りのようなものがあつたほうが普通で、ない方がおかしいと。

一本当なのか嘘なのかちょっとわからないような物語なんですけど、史実に基づいているので勉強にもなりますよね。この物語が代々語り継がれていったら面白いと思います。

やっぱり前橋、まあ高崎も、群馬もそうだろうけど、自分たちの街がかつてどういう形で出来てきたかっていうのをもう一度見直してみるのもいいんじゃないかなあと。それから、日本のあちこちでお祭りがあるけれども、調べてみると江戸の終わりから明治にかけて、やっぱり日本の中で大きな社会的な変革や天変地異があった時期に、それに伴って日本中にお祭りが出来る。日本の、今残ってるお祭りの半分くらいはその時代くらいに出来たのが多いんですよ。もちろん京都の祇園祭みたいに、すごく古いものもあるけれど。

一やはり鎮魂の意味や自然に対する畏怖があったんでしょうか。

そうそう。京都の祇園祭りも鎮魂の意味で始まるわけじゃないですか。戦があっ

たり疫病が流行っていて、それを治めるために。で、ちょうど2011年に震災もあつたりして、やっぱりそれもね。

一白川さんとしては木馬祭りがずっと続いてほしいですか？

続いていけばいいとは思うけど、それは地域の人の気持ち次第だから。別に無理強いしなくてもいいかなと思ってます。一現在進行中のプロジェクトとして、新潟の「沼垂（ぬめたり）ラジオ」がありますが、これはもう長いんですか？

2012年に「水と土の芸術祭」で新潟へ行って、その時にまだ昭和の雰囲気が残ってる沼垂市場っていう場所があって、そこでラジオ局を始めたんですよね。近くに住んでいる年配の方たちに来てもらって沼垂弁講座をしてもらったり、昔沼垂でよく食べられてた食事を再現してもらおうっていうんで、地元の人にエビを朝獲ってきてもらって、それをラジオで料理したり。結構地元の人でね、声かけると、これだったら私もやれますっていう人が出てきてくれる。それで続ける。僕はただ機械を置いて座っているだけ。で、通る人に声をかけて、スタジオに入れて話してもらって。それが徐々に口コミで広がってって、話したいことがある人がだんだん集まってくるようになった。芸術祭が終わった後も地元の方々に機材を渡して引き継いでもらって、現在の「NEW 沼垂ラジオ」になったんです。ラジオっていうメディアを通じてこんなこともやれる、あんなこともやれるって地域の人が思って、楽しんでやってくれるようになったんで良かったと思いますよ。一表紙に使用した写真についてですが、無人駅でベヤングを食べるという白川さんの作品にかけて、今回の表紙になったんですが、元々この作品を作るきっかけはなんだったんですか？

当時勤めていたデザイン学校が倒産して、アトリエとかが全部なくなっちゃって。僕はもうずっとマイナーな作家だから所属している画廊はないし美術館とかに

（無人駅での行為（群馬の食））2000年
Photo: 木暮伸也



もない。コンスタントに作品を発表できる場所がないわけですよ。で、お金もないからいろいろ考えて、無人駅だったらただで展示ができるしアリじゃないかなと思って。ちょうどこの頃インターネットが少しずつ流行ってきた時代だったので、それで僕はこの行為をインターネットに流したりしてた。日本中に無人駅みたいなのがあるだろうから、そういうところで同じようにやりたいっていう人がいたらどうだろうって。

一近年の活動は地域に密着したアートプロジェクトが多い印象ですが。

沼垂ラジオも沼垂という場所が面白い、前橋も弁天通りが場所として面白いと感じて、そこで人と出会って（プロジェクトを）提案するということであって、初めから地域のためにとは考えてないんですよ。僕が一番気になるのが、芸術祭みたいなものは期間中は騒いでいても、終わっちゃうとなくなっちゃう。本当にそういうものが地域アートの目指しているものなのか、僕はちょっと疑問に感じるから。だから今回もたまたま木馬祭りを続けていけるのは、アーツ前橋の方でかなり助けていただいているんだけど、沼垂ラジオのように、地域のほうで少しずつ自主的にやっていけるようなものが残るというか。そのほうが僕はいいんじゃないかなあとと思いますね。

手前／《想起の形》2004年 奥／《AKAGI》1995年
いずれもアーツ前橋蔵



Photo: 木暮伸也

白川昌生（しらかわ・よしお）

1948年福岡県北九州市生まれ。1970年に渡欧。1983年に帰国し、1993年に地域とアートをつなぐ美術活動団体「場所・群馬」を創設。2002年北九州ビエンナーレでの「アートと経済の恋愛学」（北九州市立美術館）、2007年「フィールドキャラバン計画」（群馬県立近代美術館）、2014年「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ 地域に生きる想像☆の力」（アーツ前橋）など、国内外で活躍する。美術家としての活動のほかに評論執筆活動も盛んに行う。主な著書に『日本のダダ1920-1970』（1988・2005）、『美術、市場、地域通貨をめぐる』（2001）、『美術・記憶・生』（2007）、『美術館・動物園・精神科施設』（2010）など。

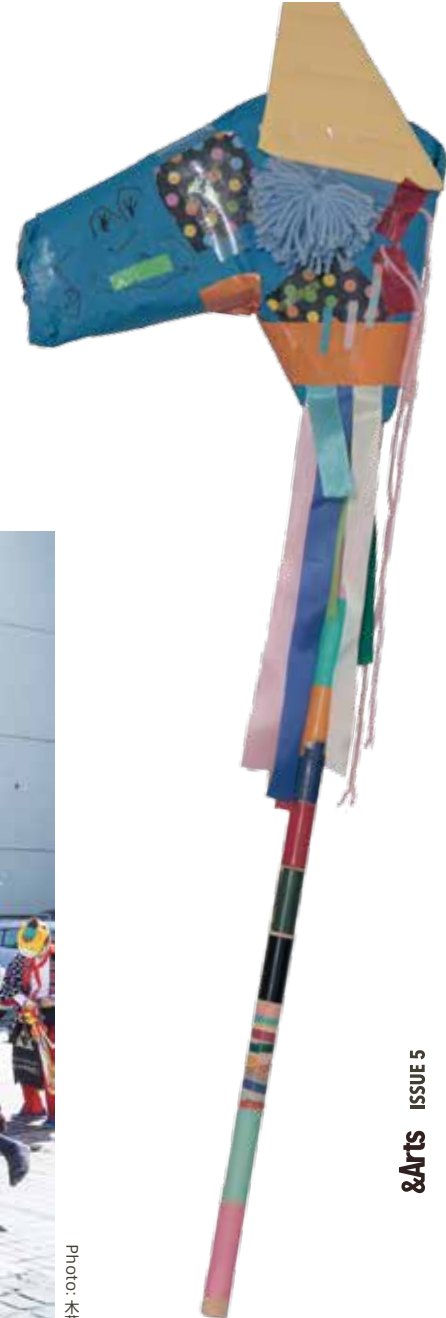
白川昌生「新作彫刻展 - Dark Light -」

2016年10月8日 [土] -10月20日 [木] 10:00~19:00

ガトーフェスタ ハラダ 本社ギャラリー（高崎市新町1207）



これが うま 駅家ノ木馬祭だ！ ダ！ダ！ダ！



「歴史のなかに我々が忘れてきてしまったなにか」を
新たな物語で再生する

アーティストの白川昌生が制作した物語「駅家ノ木馬祭（うまやのもくばまつり）」は、江戸後期の侠客として知られた国定忠治の子・寅次を主人公に、彼がかかわった人々と、前橋が製糸業で栄えた激動の時代背景を描いている。明治18年、度重なる自然災害や疫病の流行、大火事などがまちの人々を苦しめたこの年に、寅次は大蓮寺の弁財天のお告げを聞き、混乱の時代の終わりを知らせ、人々に希望を与えるために木馬祭りを始める。多くの町人たちが祭りに参加し、「木馬だ、木馬だ、ダ、ダ、ダ」という

掛け声が前橋のまちなかに響いたという。
現在の木馬祭りは、この物語のなかで戦前には廃れてしまったとされる祭りを、弁財天のお告げのとおりにより2011年に復活させたもの。白川はこのプロジェクトを「我々が忘れてきてしまったなにかを復活させる試み」だという。その想いはまちの人々に受け継がれ、今年で4回目を数える。法被をまとい、手にそれぞれの馬を持った人々が、今年も巨大な木馬を引いてまちを練り歩き、元気な「ダ！ダ！ダ！」の掛け声とともに舞い踊るだろう。

INFORMATION

「駅家ノ木馬祭」2016年開催日程

日時：2016年10月30日（日）

1回目 10:30～／2回目 13:30～

集合場所：大蓮寺（弁天通り商店街内）

前夜祭も開催！！

無病息災を祈願して、藁で作った馬のお焚きあげを行います。

日時：10月29日（土）18:00～

場所：YAMADA グリーンドーム前橋 第5駐車場



Photo: 木暮伸也



基本姿勢

馬踊り解説

津軽地方に伝わる「荒馬踊り」をベースに神楽太鼓奏者の石坂玄士が振り付けを考案。「木馬だ、木馬だ、ダ、ダ、ダ」の掛け声とともに、木馬を囲んで踊る。



二つ飛び

もくばだ

もくばだ

馬を体の前に持ち、片足を上げて2回ずつ跳ねる。



四つ飛び

馬を腰の位置まで振り下ろし、片足を上げて4回ずつ跳ねる。



いななき

馬を振り下ろし、後ろ足を伸ばした姿勢から軸足を上げ、馬を高く掲げる。



ギヤロップ

馬の頭を目線の先に構え、両脚をひらき、腰を落とした姿勢のまま前に進む。



木馬祭りの踊りの振り付けを担当したのは石坂玄士さん(写真左)。神楽太鼓奏者として神社や寺院での演奏を数多く行い、神楽師として桐生市の太々神楽広沢連中に在籍。神楽太鼓、和太鼓、銅鑼などを使って独自の音世界を表現しています。今回モデルをお願いしたのはアーツ前橋サポーターの河島梓さん(写真右)です。初めは硬かったけれど、石坂さんのレクチャーを受けながらだんだん様になってきました。祭半纏がお似合いですね！

COLUMN アーティストコラム

「私のおすすめアイテム」 伊藤 存

私のおすすめアイテムは「生物から見た世界」という本。ここではヤーコプ・フォン・ユクスキュルというドイツの科学者による「環世界」という研究が紹介されています。……ふとかがんだ目の前の茂みにマダニがいる。その茂みの隣に鏡があり、そこにはマダニを見つめている私が映されている。それはあまりにも客観的な私の姿。しかし、そんな私の姿はマダニには認識されていない。マダニの環世界には動物の体から発せられる酪酸がまず重要で、それを感知し首尾よく動物の体に落ちて体毛をかいくぐり、皮膚に食い込み血液を吸う。こんなふうには順番に訪れる世界にいるらしい。だから酪酸を感じていないマダニは無の世界にいる様なものなんだろ

う。安定感のあるような客観性という言葉に対する不信感がにわかに湧いてくる。客観的と思っていた鏡の中の世界は、マダニの側に立つと打ち砕かれる。マダニに始まり、ミツバチ、ハエ、イヌ、ネコ、コクマルガラス、様々な主体が持っている環世界が次々と現れ、最後には木の瘤にお化けの顔を見だし怯える人間の子どもの魔術的環世界にまでいたる。こんなユクスキュルの手引きは、例えばレイシストの排外主義は魔術的環世界の表現にすぎないことを教えてくれる。主体によって変幻自在な「環世界」で詰まった世界は無限に豊かで、そのことを知るだけで無限に得をしていく、のに。



伊藤 存 (いとう・ぞん)

1971 年大阪府生まれ、京都市在住。動植物や人などをモチーフに、おもに刺繍作品を制作している。「縫って描く」独自のアプローチで、具体的に見えているもの、当然だと思っていることの多様性を模索している。前橋では、2013 年に旧銭湯「磯部湯」を使った公開制作・作品展示を行ったほか、「地域アートプロジェクト報告展 磯部湯活用プロジェクト」(2014 年) に出品。2016 年には、前橋七夕祭りにあわせ、七夕飾り用の作品を制作した。

WORKS コミッションワーク

青い猫が空想世界へと誘うカフェ

TokyoDex

《青い猫のいる街》

Blue Cat City, 2013

カフェの壁画、床面、ポスター掲示板のマグネット



Photo: 木暮伸也

美術館体験の楽しみにカフェの存在は大きい。展覧会の余韻に浸りながらお茶や食事を楽しみ、ゆったりとした時間を過ごす。アーツ前橋のカフェには、作品を独占できる席があります。カウンターの開閉式の扉で少し仕切られた奥のソファに座ると、まるで空想の世界に入り込むような感じに襲われます。

ひととき大きな文字、赤い服を着て宇宙服のヘルメットをかぶったような人、見慣れない生き物や植物が描かれ、次々と重なりながら広がっています。前橋出身の詩人・萩原朔太郎の詩からインスピレーションを受けており、蝶が飛びまわる様子の「てふてふてふ…」(『恐ろしく憂鬱なる』より)、犬の鳴き声の「やわあ」(『遺伝』より)などの印象的な擬態語や擬音語が、不思議な世界観を創り出しています。

この作品は、ライブペインティングやワークショップ、音楽などのイベント会場の演出など、幅広い活動をしていたデザイングループ・TokyoDex が手掛けました。「Dex」とは独創的、巧み、器用といった意味のある「dexterous」という言葉によるといいます。ペインティングの制作過程を映像に記録し、まるで絵が生成していくような作品がインターネット上で注目され、本作の制作過程の映像も Youtube でご覧いただけます。

Arts Maebashi Cafe「青い猫のいる街」

<https://www.youtube.com/watch?v=7e8H91rmUk4>

アーツ前橋イベント情報

アーツ前橋がしゃべる！

《たてもののおしばい》

日時：10 月 28 日(金)～11 月 5 日(土)
18:00～21:00

場所：アーツ前橋 外壁

建物が人格を持ち、物語を語るという、アーティスト・高橋匡太の作品。前橋を拠点に演劇活動を行う小出和彦が脚本を担当。アーツ前橋の外壁に現れる顔が、毎夜みなさんに語りかけます。



Photo: 木暮伸也

滞在制作事業

ARTIST IN RESIDENCE

アーツ前橋では、アーティストの活動を支援するために、国内外のアーティストを毎年招聘し、作品制作に必要な空間と時間を提供する、滞在制作事業を行っています。

今年は、機関紙第 4 号で紹介した、コロンビアとオランダを拠点に活動するルイサ・ウングアルと、公募によって選出された、桐生市出身で現在は東京で活動する梅沢英樹を招聘。梅沢は音を使った作品を制作するアーティスト。

前橋に滞在することで、どんな作品が 2 人から生まれるか、乞うご期待!!

ルイサ・ウングアル

Luisa Ungar

滞在期間：10 月中旬～11 月下旬

滞場所：豎町スタジオ

梅沢英樹

UMEZAWA Hideki

滞在期間：12 月 1 日(木)～27 日(火)

滞場所：豎町スタジオ

※滞在期間は変更になる場合があります。



まえばしぶんか探索隊
うしろまえばし
<https://www.facebook.com/ushiromaebashi/>

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！

馬場川。三河町の東福寺の辺り。典型的な「トマソン物件」(by 赤瀬川原平)があります。行き止まりの橋。なんでこうなったんだろう、と想像すると楽しいです。(隊員 A)



「この橋、渡るべからず!？」

まえばし COLLECTORS FILE #2



立川町通り
大川屋主人

大川 優さん

先代から受け継いだコレクションにいろんなデザインがあって、自分も興味を持って集めてみようかなと。古伊万里のものが多く、染付(そめつけ)というのは全部手描きで一個一個が違うんです。藍の色に惹かれてか、最近は若いコレクターの方もいるみたいですね。

街の人が集めているものを紹介してもらおうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？

そばちょこ 約200個



みんなで作る「マエバシマンが!」1コマ横36×縦23ミリのフォーマット(拡大可)でご応募ください!宛先は〒371-0002 前橋市千代田町5-1-16 アーツ前橋 アンドアーツ担当まで。



EVENT

まちなかイベント情報

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク —江戸川乱歩と萩原朔太郎」展

10月1日[土]～12月18日[日]
9:00～17:00 水曜休み
前橋文学館 2 階展示室
同時代に活躍した2人の文学者の交流を紹介します。

まえばしファーマーズマーケット

10月22日[土]・23日[日]
中央イベント広場
10:00～16:00
前橋産の食材を使用した屋台や、野菜や畜産加工
品が並ぶほか、野菜の収穫体験などもできます。

ノベッコ祭り

11月4日[金]
18:00～21:00
前橋中央イベント広場
前橋市友好都市のオルピエートのノベッコと
ワインに合ったおいしい料理が味わえます。

第14回全国アマチュア ちんどん競演会 in 前橋

11月5日[土] 11:00～16:30
前橋中心商店街、中央イベント広場
全国から集まったアマチュアちんどんマンが
中心市街地を練り歩きパフォーマンスを披露。

今月のおすすめ

by

ROBSON COFFEE アーツ前橋店



「本日のコーヒー」から選べる、プレスで
淹れる「エチオピア・イルガチエフェ」。
華やかなローズやバニラの香味と、ピー
チやアールグレイを思わせる優しい口当
たりがこの季節にぴったりです。450 円

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

「フードスケープ 私たちは食べものでできている」

2016年10月21日[金]ー2017年1月17日[火]

開館時間：11:00～19:00（入場は18:30まで）

休館日：水曜日（11/23 開館、11/24 休館）、年末年始（12/28～1/4）

観覧料：一般 600 円／学生・65 歳以上・団体（10 名以上）400 円／
高校生以下無料

アーツ前橋では衣食住をテーマに展覧会や地域アートプロジェクトを
開催してきました。「フードスケープ 私たちは食べものでできている」
はその第3弾、「食」がテーマの展覧会です。誰もが当たり前のように
に行っている食べることを通じて、私たち個人がどのように自然や社
会と結びついているのかを、アーティストの表現によって伝えます。
会期中、シンポジウムやトークイベントなど、さまざまなイベントを
開催します。

出展作家／岩間朝子、ジル・スタッサル、中山晴奈、南風食堂、
風景と食設計室 ホー、フェルナンド・ガルシア・ドリ、マシュー・
ムーア、ワブケ・フェーンストラ



展覧会期間中、ロブソンコーヒーアーツ前橋店にて
ジル・スタッサルによる食べられる作品《わたし
たちそのものを食べる》（写真左）を数量限定で販売
します。



岩間朝子《non-visible》2013 年
北京／中国 デリク・ヤングとのコラボレーション
撮影：Derrick Wang

関連イベント

シンポジウム「食の未来を考える週末」

出展作家や飲食店経営者、料理人、大学教授など多様な分野の専門家を
ゲストに招き、私たちの「食の未来」について一緒に考えていきます。

日時：1 日目 10月22日[土] 中央イベント広場
16:30～18:30 「食と社会を結ぶ」

2 日目 10月23日[日] シネマまえばし
13:00～15:00 「食の倫理：グローバル化と地域」
15:30～17:30 「フードスケープ 食卓からのまなざし」

参加費無料 各回先着 100 名 [要申込] アーツ前橋 Tel:027-230-1144

「ギブ・ミー・ベジタブル」

だれでも参加できる、入場料が野菜の自給自足型
イベントを開催します。

持ってきた野菜をその場で料理人が即興で料理し、
無料で提供します。

10月22日[土] 11:00～14:00

会場：中央イベント広場

企画：南風食堂ほか

参加費：野菜 [申込不要]

&Arts ISSUE 5

アンドアーツ 第5号

表紙の人：白川昌生 & 弁天手芸店 新井恭子さん

発行：平成 28 年 10 月 13 日 企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネート：M-wave

編集：岡 正己 編集・アートディレクション・デザイン：殿岡 渉（あしか図案） 写真：上原ミワ、木暮伸也

ロゴデザイン：萩原貴男（OGIWARA TAKAO DESIGN） 制作補助：吉井あずみ

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016

